

本連載における「翻訳」について①

前回(9月号)では、本連載における「翻訳」という用語について、暫定的に「天理教の教義、実践、伝統などを言語や表象を通して別の形で表現すること」と説明した。今回からは、その説明を掘り下げる形で話を進めていきたい。

ただし、その前に一つお断りしておきたいことがある。それは、本連載の主題は、「翻訳とは何か」を論じることではないという点である。前回でも少し触れたように、本連載のねらいは、「翻訳」という言葉を使うことで、これまで異文化伝道研究においてあまり注目を浴びてこなかった地域の取り組みを浮き彫りにすることにある。したがって、「翻訳」という言葉は、その取り組みを分析するための一つのツールであり、あくまでも主題は、フランスを中心とするヨーロッパでの伝道の取り組みについて考察することにある。

なお、「翻訳とは何か」という問いについては、成田道広氏が「伝道と翻訳—受容と変容の“はざま”で—」を本誌で連載しており、その内の第2回～第11回(2016年11月号～2018年6月号)にわたって、「翻訳とは」(第2回～第7回)、そして「宗教言語の翻訳」(第8回～第11回)という形で、言語学、言語哲学、解釈学などの観点から「翻訳」についての主要な理論や知見を簡潔な形で紹介している。筆者もそこから大きな示唆を受けており、本稿においても、成田氏の取り上げている論点や文献を適宜参照し、その上で本稿での「翻訳」が意味するところを明確にしながら議論を起こしていきたい。

「翻訳」と“Translate/Translation”

さて、本連載の読者の中には、上述した「翻訳」の定義をあらためて見直してみた時に、なぜ「天理教の教義、実践、伝統など」を「別の形で表現すること」を「翻訳」と呼ぶのか、という疑問を持たれた方がいるかもしれない。

もし、読者の頭の中にこのような問いが浮かんだとすれば、それにはこの「翻訳」という言葉について、日本語と英語の間に存在する意味の「ずれ」が関係しているかもしれない。というのは、筆者がフランスの天理教の活動を研究する中で「翻訳」という言葉にたどりついたのは、英語という言語を介して研究していたからに他ならないからである。

では、日本語と英語ではどういった「ずれ」があるのだろうか。たとえば、日本語の「翻訳」という言葉については、『日本国語大辞典』では以下のように定義されている。

1. ある種の言語・文章を同じ意味の他国の言語・文章におきかえること。また、その文章。
2. 原語を、その語の意味に相当する日本語の単語でおきかえること。また、その文章。
3. わかりにくいことば、特殊なことば、また符号などを一般的なやさしいことばに言いかえること。また、そのことば。

この説明を見る限りでは、日本語の「翻訳」という言葉は、言語や符号などを別の言語や言葉で置き換えることに限定されていることに気づく。

一方で、英語ではどうだろうか。一般的に、日本語の「翻訳」にあたる言葉については、「翻訳する」という動詞であれば“translate”、「翻訳」という名詞であれば“translation”という単語がそれぞれ対応する。そこで、英英辞典として世界的に権威のある『The Oxford English Dictionary』を開いてみると、

“translate”という単語には、日本語の「翻訳」よりも幅広い意味があることに気づかされる。全てを列挙するには紙幅が足りないため、その中で主だったものを挙げてみよう。

- ・ある人、場所、状態から別の人、場所、状態へ運んだり、伝達したり、取り除いたりすること (To bear, convey, or remove from one person, place, or condition to another)
- ・ある言語を別の言語に変えること (To turn from one language into another)
- ・形、外観、中身を変えること (To change in form, appearance, or substance)

この中で日本語の「翻訳」の意味に近いのは、「ある言語を別の言語に変えること」という定義であろう。一方で、何かを移動させたり変化させたりするという定義については、日本語の「翻訳」には見られない意味であることが読み取れる。

これについては、英語の“translate”という単語の語源をたどっていくと分かりやすいかもしれない。『オックスフォード英単語由来辞典』によれば、“translate”という単語は、ラテン語“transferre”「持ち越す」の過去分詞形である“translatus”に由来するという。また、『英語語源辞典』による説明も加えると、この“translatus”という単語は、最初は過去分詞として使われていたが、古フランス語の“translater”、そして中世ラテン語の“translatere”によって補強されることで動詞として使われるようになったと言われる。なお、ここでの“transferre”「持ち越す」というラテン語は、“trans-”「越えて」と“ferre”「運ぶ」という言葉から成っており、一つのものがある地点・場所から別の地点・場所へと持ち越されるイメージを喚起する単語と言えよう。

ここから分かるように、この“translate”という単語がラテン語の“transferre”「持ち越す」に由来があるからこそ、言語に限らず、あるものを別の形に変化させるといった意味合いが出てくるのであろう。この広い意味合いは、たとえば英語で“*We should translate that idea into action*”(「その考えを行動にうつすべきだ」)などというように、何かを別の形に変換するという意味合いで日常会話などでも使われる用法である。

その意味では、この英語で示される「翻訳」という言葉の広い意味は、成田氏が連載の第2回(2016年12月)で参照していたロマーヌ・ヤーコブソンの翻訳の三形態の一つである「記号法間翻訳」、すなわち「ことばの記号をことばでない記号体系の記号によって解釈すること」(ヤーコブソン 1973: 57-58)に通じるものがあるともいえるだろう。

筆者がフランスの天理教の活動を研究していた際に、それをどのような角度から理解しようかと大学院の指導教官の一人に相談すると、“translate”ととらえてはどうかというアドバイスをもらった。その時は当然ながら英語で会話していたので、“translate”という言葉聞いた時に違和感はなく、なるほどと合点したような記憶がある。本連載で、天理教のフランスでの活動を「翻訳」という切り口で考察する上で、まずはこの言葉の指し示す範囲について確認しておきたい。

[引用文献]

ロマーヌ・ヤーコブソン(川本茂雄ほか訳)『一般言語学』みすず書房、1973年。